

# かわらぬ人 大平さん

後藤 田 正晴

大平さんに初めてお会いしたのは昭和二十二年、大平さんが大蔵省給与局給与第三課長として四谷の飯庁舎で勤務しておられた時である。当時、私は内務省地方局に籍をおき、終戦後のインフレ昂進に伴う生活難のなかで、労組の赤旗に取り巻かれての地方職員の給与引上げのことで四谷に通っていた時のことであった。

いつもお会いしてもものはいわないし、いいのか悪いのかはつきりせぬ、それでいて何となしに真剣に考えてくれている誠意をそこはかたなく感じさせる茫洋とした印象が忘れられない。口先でなく身体全体で人間の誠実さを感じさせるものが大平さんにはあった。あれから三十余年の長い間、不思議なご縁でお付き合いをさせていただいた私の終始変わらぬ大平観である。激しく移り変わる権謀術数の渦巻く政治の世界で、謙虚さ、絶えざる反省、精一杯の努力、そして誠実さを失わなかったのが大平さんの生涯であったと思つ。

私は、田中、大平という二人の総理に直接お仕えする幸運に恵まれた。いうまでもなく、田中さんは緻密な頭脳と逞しい実行力で、十里、二十里の先を見ながら、どんどん突き進んで行く型、大平さんはドンと腰を落着けて考えながら着実に歩いて行く、そして歩き出したら決して止めない型、どうみても合うはずのないお二人の性格だと思つが、このお二人がどうしてあのように気が合ったのだろうか。一方は、「大平の奴、何をくずくずしているのか」と時につぶやく。他方は、「角さんはどうしてあのように走るのか」と心配をする。正反対の性格だからこそ合ったのだらうといえはそれまでだが、私は、人間というものの利害を越えた不思議な一面をこのお

二人の間柄に見ることができた。

総理の権威とでもいうか、総理大臣と大臣の間には大変な格差があるものだ。田中内閣当時、そのような場面をかいま見ることもあったが、田中さんと大平さんが話し合われている時にそれを感じたことは一度もない。人間として二人は尊敬し合い許し合っていたからであるうか。

昭和四十九年の参議院選挙で失敗し、失意の底にあった私が、偶然の機会で大平さんにお会いした時、大平さんがしみじみとした口調で、「オイ後藤田君、今度こそは東京に上がってこいよ」と励まして下さった。人間の温かき、情けをこの時ほどありがたく思ったことはなかった。言葉でなく心を感じたからであった。派閥を異にする私が総裁公選で全力を傾けて大平支援に回ったのも、これが一つの契機であったかも知れない。七日会が誰に決めようとも私は大平さんを支援しようと思ったのである。もちろん、日中国交回復の際にみせた大平さんの不動の意思に頭領としての器をみただけでもあった。

先の国会で党の内紛の結果、内閣不信任案が成立した。あの時の衆議院の解散は選択の余地のない決定であったと思うが、大平さんの、「解散をいたします」という静かな声は、いまもって私の耳に残っている。解散か総辞職か考えざるを得ないところであったかも知れないが、大平さんのあの時の表情には少しもためらいはみられなかった。当然のこととはいえ人間の器量の分かれるところでもあった。

平素は立派なことをいい立派な人物だとみられている人が、いざ鎌倉という重大事に臨んで、案外、遅疑逡巡したり、あるいは、感情にとらわれて判断を誤ることの多いのが世の常である。大平さんは大事に臨んで平常心を失わぬ自然体の人であった。国の運命を委せて間違いない人物であった。政治家として戦場における死ではあったが、惜しい人を失ったものである。

(衆議院議員・第二次大平内閣自治大臣)